

# 女たちの明治維新

第六回

## 大山捨松

画：chinatsu

文：東川 隆太郎

鹿児島生まれ。NPO法人まちづくり地域フォーラム・かごしま探検の会代表理事。地域資源、鹿児島県内の歴史を機軸とした、鹿児島・九州の魅力を観光・教育・まちづくりに展開させる活動に従事。



大山巖おおやま いわおといえ、西郷隆盛さいこう たかもりの従弟であり、戊辰戦争や日清・日露戦争などに参戦した軍人の中の軍人と呼べる人物である。華やかな世界と無縁のようなイメージもある大山だが、彼の夫人は当時最も西洋的な社交場であった「鹿鳴館ろくめいかん」の花形であった。彼女の名は大山捨松おおやま すてまつ。大山巖は戊辰戦争の際に会津城を攻撃しているが、その会津城に籠城していた女性の一人であった。

### 日本初の女子留学生として学位を修得

捨松は幼名をさきといい、会津藩の国家老山川尚江重固やまかわ なおえ しげかたの五女として安政七（一八六〇）年に生まれた。戊辰戦争後の明治四（一八七二）年、十一歳のさきは岩倉使節団に同行し、日本初の女子留学生としてアメリカに渡る。女性の留学はこの時代においては大変な決断であり、さきの母は「娘は一度捨てたと思ひ、帰国

を待つ（松）」という思いから捨松と改名させた。

アメリカでの捨松は英語や習慣、文化はもちろん、名門ヴァッサー大学でフランス語や数学、植物学、哲学などを学んだ。優秀な生徒で、卒業の際には「イギリスの日本に対する外交政策」と題した演説を行い好評を得ている。捨松は日本人女性として初めて学位を得ることとなった。

### 周囲の反対を押し切った結婚

明治十五（一八八二）年、二十三歳の捨松は日本に帰国。しかし当時の日本には女性が活躍する場はなく、捨松はアメリカの友人に「ここでは総てがアメリカと違うのです。何かをするということは不可能に近いのです」と愚痴をこぼしている。

こうした環境の捨松に結婚を申し込んだのが、当時陸軍卿だった大山巖である。大山は捨松が参加した



捨松は西洋流の洗練された立ち居振舞いから鹿鳴館の花と呼ばれた。

## 大山捨松 略歴



国立国会図書館蔵

- ▶安政7年(1860)  
会津で国家老の娘として生まれる。
- ▶明治4年(1871)  
岩倉使節団に同行し、アメリカへ留学。
- ▶明治16年(1883)  
大山巖と結婚。
- ▶明治33年(1900)  
女子英学塾の顧問に就任。
- ▶大正8年(1919)  
享年58歳で死去。  
栃木県那須野の墓地に埋葬。

## 鹿鳴館での活躍と 女子教育への尽力

英語劇を見て捨松に惹かれたといわれているが、大山は遺恨のある薩摩の人間であり、捨松の家族は当然のように反対した。しかし大山の従弟である西郷従道の説得もあり、幾度かのデートを重ねた上でふたりは結ばれる。捨松は友人への手紙に「大山氏はとても素晴らしい方で、私は自分の将来を彼に託すことにしました」と書いている。披露宴は完成したばかりの鹿鳴館で行われ、生涯夫婦仲は良好だったという。

結婚後、大山は伯爵に叙せられ、伯爵夫人となった捨松は多くの舞踏会で本場仕込のダンスを披露し、鹿

鳴館の花と呼ばれた。西洋流の立ち居振舞いに慣れ外国語も堪能な捨松は各国の外交官ともよく交流し、外交面でも夫の助けとなった。また華やかな活躍にとどまらず、同期に留学した津田梅子が開塾した女子英学塾(後の津田塾大学)の顧問を務めたほか、日本初のチャリティーパーザー「鹿鳴館慈善会」を開き、看護婦学校の設立にも寄与するなど、日本の女子教育や慈善活動に大きな業績を残している。

夫の死後は孫の世話をする穏やかな日々だったが、晩年は再び女子英学塾の運営に奔走し、津田の後任塾長の就任を見届けた後亡くなった。明治という激動の時代に、自らの力でひととき華々しく活躍した女性であった。